



◆ ^{みずぎ}水着をわすれないでね

^{しつない}室内プールはあつかった。むっとする^{ねつき}熱気が、

ファドマの^{ふく}服の中にも入りこんでくる。

マリアが、プールのはしから^{みず}水にとびこんだ。

でも、おなかからバシャッとおっこちてしまった。

^{おとこ}男の子たちが、げらげらわらう。

「なにがおかしいのよ!」マリアが、^{みず}水から^{かお}顔をだしてさげんだ。

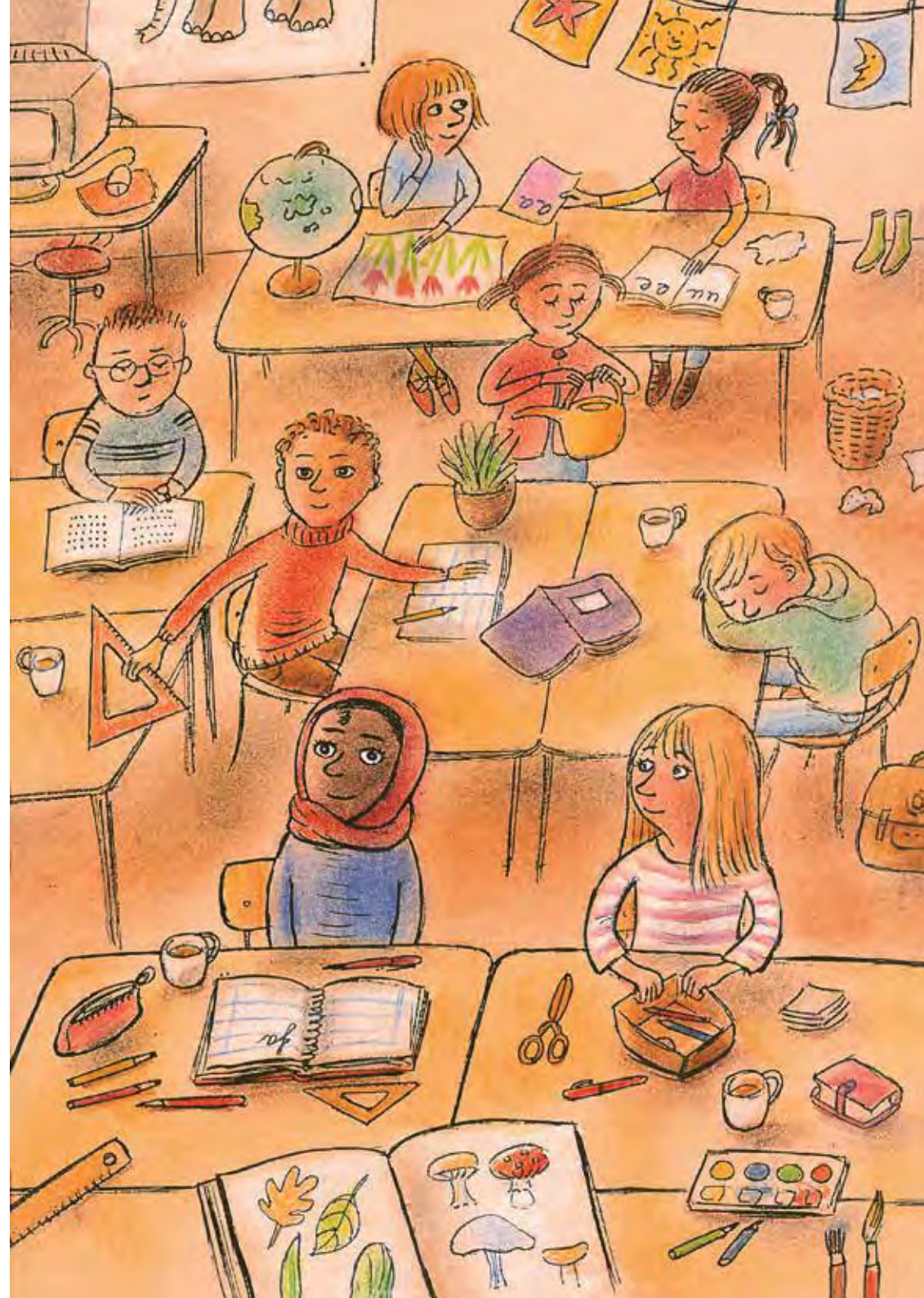
「あんたたちだって、へたくそじゃない!」

ファドマは、かべぎわのベンチにすわってながめている。

^{きんようび}金曜日はいつもそうだ。^{きんようび}金曜日はプールの^ひ日だ。



ファドマのクラスの先生は、アンナ先生だ。
木曜日の午後になると、アンナ先生は、
きまってこんなふうにいる。
「あしたはプールの日よ！ 水着をわすれないでね！」
でも、ファドマは水着をもっていない。
もっていたって、どうせなんの役にもたたない。
およいじゃいけないんだから。
家でプールの授業の話をしてみたことがあったけれど、
お父さんもお母さんも、ファドマのことを
ちっとも信じてくれなかった。
クラスのみんながいっしょにおよぐなんて。
女の子と男の子がいっしょにおよぐなんて！
みんなはきっと、およげるようになるんだろう。
でも、ファドマはおよげないはまだ。



はじめてのプールの日の金曜日には、こんなことがあった。
ファドマが、学校に行こうとすると、
「てつだってちょうだい!」と、お母さんがいった。
「ああ、いそがしい。弟や妹たちのめんどうをみってくれるわね」
それで、ファドマは家にいることになってしまった。
でも、かえってほっとした。
先生になんていえばいいか、わからなかったからだ。
「水着をもっていないんです」とも「みんなといっしょに
およいじゃいけないんです」ともいえない。

三日後の月曜日、アンナ先生はファドマにいった。
「金曜日はどうしたの? 病気でお休みするときは、
お母さんが学校に電話することになってるでしょ!

わかってるわよね!」
先生はイライラしているみたいだった。
先生にはわからないんだ。
お父さんやお母さんに、電話なんてまだむりだったこと。

あたらしいことばをおぼえるだけでせいっぱいだから、
電話ごしに、早口のスウェーデン語でぺらぺら話されたって、
わかるわけがない。

「わたし、ぐあいがわるかったんです」
ファドマは小さな声でいった。
先生は、もう何もいわなかった。

◆ けんがく 見学

つぎの木曜日の午後がすぐにやってきた。

「水着をわすれないでね!」

チャイムがなると、先生はファドマのそばにきて、
話しかけた。

「あしたのプール、いっしょに行きましょう。

およぎたくないなら、見ているだけでもいいわ」

およぎたいな。だれにもわかってもらえないだろうけど。

でも、ほっとした。先生はおこっていないみたい!

「はい」ファドマはいった。「いっしょに行って見えます!」

